

眞宗學の本義

金子 大榮

—

眞宗學の成立のためには、先づ以て宗祖聖人を學者として見ねばならぬやうに思はるゝ。さうで無くては、眞宗學徒は宗祖とは別の道を取ることとなるからである。

併し宗祖を學者とすることは、何とは無しに感情のそぐはぬものがあるやうである。それで我等は第一に宗祖は教者であつて學者でないと言はうとする。それは誤りのない事實である。眞宗學とは宗祖の教を學ぶものであるからである。併しその宗祖の教を見るに、それはまた經釋の教を學ばれしものの如くである。特に大聖の眞言、大祖の解釋といふ言葉に依れば、大祖の解釋に依りて大聖の眞言を學ばれしものといふを得るであらう。されば我等は宗祖も亦學者であるとして、祖師の學風に從ふべきではないであらうか。

併し我等は第二に祖師の教に對するものは行信であつて學問ではないと言はんとする。さらば何故に行信を學問と呼ぶことが能きぬのであらうか。「超世希有の正法、開思して遲慮することなかれ」といひ、「眞宗の教行證を敬信して、特に如來恩徳の深きことを知りぬ」と言はる。その開思といひ信知といふものは、學知といふものと異なるものではないであらう。若しそれが異なるものとせば、祖師にあつての學と我等にありての學との概念の相違に依るものであらねばならぬ。

そこに學の二概念がある。若し理知分別をのみ學とせば、宗祖は明らかに學者ではない。恐らく佛教本來の學といふものは、既に今日の學といふものと異なるものであらう。佛教に於ける學は學道である、學道は即ち行道であるからである。學解といふもこの行道から領會せられ

たるものに他ならない。茲に行信と學知と歸一せらるべき意味がある。随つて私は、宗祖も教を學ばれたるものとすることを得、そしてそこに眞宗學は成立すといふ斷定を爲さんとするものである。

二

これに依りて我等は先づ『教行信證』から、眞宗學の意義を學ばねはならぬ。それは既に言ふ如く正法の聞思である。この聞思は佛教の三學たる慧の道である。聞即信と領解せられし祖師に、思を重んぜられし所以は、學徒の正に意を留むべきものであらねばならぬ。それは決して言葉の綾ではない。『涅槃經』の「聞より生じて思より生ぜ」ざるを「信不具足となす」の説は、「信文類」と「化身土文類」とに引用されてゐる。特に後者には、「是の如き人、また信ありといへども推求する能はず、是の故に名けて信不具足といふ」の説も擧げてある。その推求とは、即ち學知の謂ではないであらうか。

宗祖に於ける此の推求の思は、正しく「信文類」已下の述作となれるものである。若し聞のみで思を要せぬならば、教行二卷で事足るであらう。行中自から信證あるか

らである。然るに更に「信文類」を述作せられし所以は、聞ける所を思うためである。信するところを推求せんがためである。それ故に「且く疑問を至して遂に明證を出す」といふ。かゝる疑問と明證とこそは、眞實に學といはるゝものであらうか。これに依りて三二問答は生じ、測り難き佛意に對して、「竊かに斯の心を推」されたのであつた。而して「是を以て」といひ、「何を以ての故に」といふことに於て、本願の事理を明らかにせらるゝ。然るに我等に取りては、道理を明らかにするの他に學問はないのであるから、祖師を學者とするに何の誤りもないのである。

我等はまた之に依りて、祖師の學の内容をも知らしめられる。それは教學の性格として、教の宗體がそのまゝ學の宗體となることである。それ故に眞宗の教體は名號であり、その教宗は本願である限り、學の體は名號を稱することであり、學の宗は本願の意を思ふことであらねばならぬ。換言すれば眞宗學の對象は本願であり、その方は念佛であるといふべきである。これ即ち念佛を以て轉惡成徳の正智とし、信心を以て除疑護證の眞理といはれし所以である。而して學問とは正智に依りて眞理に達

し、眞理によりて正智を得ることの他にはないのである。

三

然るに行信を以て直ちに眞宗學とすることには、尙ほ幾多の疑問が生ずることであらう。第一に若しさうとすれば、學者は非學者との區別は没却さるゝやうである。學者は學者として信徒と區別さるゝものがなくてはならぬ。而してその信徒と異なる學者の任務は、特に教法に對する分析や總合やを行ふことにあるのではないであらうか。然るに行信を以て眞宗學とせば、その學者の意義は見失はるゝことゝなるやうである。それで果して可いのであらうか。

3 (金子)

私は充つ後者の疑問に解答しよう。宗祖の『教行信證』も亦、分析や總合やの行はれたものである。その事は法然上人の『選擇集』に對して、祖師の『教行信證』の如何に分析的であるかを見ることに依りても知られよう。併し分析とは直感的統一があつて始めて行はるゝことである。それ故にそれは分析することに依りて、彌々統一を深めることである。かゝる分析は抽象の如くにしてその實具體化である。洵に學問とは、分析即統一の行に他な

らぬであらう。それはコトハリすることに依りて、モノにするのである。

併しかゝる分析即統一の行は、必ずしも一般の人々にも要求せらるべきものではないであらう。宗祖もまた自身の述作であるにも拘らず、『教行信證』の披讀を一般に勧めずして、『唯信鈔』その他を推稱せられしことは留意すべきことである。同時に一般に披讀を勧められざりし『教行信證』を述作せられし所以も考慮せねばならぬであらう。そこには宗祖もまた選ばれたる者であるといふ意識があつたのではないであらうか。而してその選ばれたる者としての任務は、教を聞思して之を弘むるの他にはない。それは非僧非俗なる眞宗僧侶の唯一の任務である。出家修道の僧侶にもあらず、在家奉公の職業あるにもあらざる眞宗僧侶は、教法修學の他に奉公の道はあり得ぬことではないであらうか。

唯だそこに問題となるのは、選ばれたるものの意義である。思ふに選ばれたるものとは、特別の人間といふことではないであらう。それは代表者といふことである。然らば眞宗學者は、何物を代表するのであらうか。それ

は聖人によりて明らかに「濁世の群萌」と指示せられた。海に我等を代表せしものは、世の所謂知識階級の人々ではなくして、時代の民衆である。民衆の生活は思想するの餘裕なしと雖も、眞實を求むる純情は魂の底を流れてゐる。眞宗學徒はこの時機を代表して、如來の教法を學せねばならぬ。そこに永遠なる眞理を領受せられると共に、時機相應の教學が顯開せらるゝのである。

四

私は茲で當然しかあるべき教學の意義を述べて、以て眞宗學の道に資することとしよう。それは今日の所謂學と如何に異なるかを見ることもなるのである。

教學に於ては、眞理は既に聖賢によりて證得せられてあるといふ根據を有つ。その意味に於て教は學の歸依となるものであつて、把持の對象となるものではない。この點に於て教の眞理は理想とせられてゐる眞理と異なるものである。それは我等に知られてないのみであつて、何人にも知られてないものではない。これに依りて「教とは聖人、下に被るの言也」ともいはれてゐる。それは恰も慈悲の上より下に及ぶが如く、教もまた身證者より未

證者へと及ぶものである。この點に於てそれは所謂眞理愛とも異なるものであらう。隨つて教法の眞實の普遍性は、その體驗的傳統にありて、何人にでも知解せらるゝといふことにあるのではない。同時に教へ得るものは身證者のみであつて、知解者ではないといふことが看過せられてはならぬであらう。

私は是等の教學の性格の上に、その本來性・自然性・高貴性・傳統性等を見るものである。而して其の事から學ぶものの態度は自から決定せらるゝ。學徒は第一に教法に對して謙虚でなくてはならぬ。我等は教に育てられるのであつて、教を把持せんとするものではない。されば常に誠心を以て教を領解せんと願うべきであつて、自身の理知に認容せられずとて、輕々しくそれを批判すべきではないであらう。第二に教法を學ぶ態度は、必ず嚴肅でなくてはならぬ。眞理は決して趣味や詠嘆として受容さるべきものではないからである。教へらるゝとは、道を知らしめらるゝことである。與へられたる生活に對して、眼を開き、より高き領域を示さるゝことである。そこには嚴肅なるものがあると同時に、第三には其の受容

に於て深き感激があらねばならぬであらう。眞宗の學徒は『教行信證』に現はるゝ深い感激は何所から來たれるかを沈思せねばならぬ。教を學ぶものは、その學の進むに從つて、自身の領解するところに感激を有つに至らねばならぬであらう。學問は冷性なるべきが故に、感激なきものといふが如きは、少くとも眞宗學には有り得ぬことである。學問の冷性とは、赤熱の情を轉じて白熱の情たらしむることである。眞實に達せんために推求を行ふことである。それは純情の感激を滅却せしむることではない。

これらの態度は從來の眞宗學に於て、何所まで守られてあつたかは、茲に是非せぬこととしよう。私の最近に感じたことは、經釋の會通に就て反省せしめられたことである。後佛成道して前佛涅槃すといはるゝ。されば傳統の高僧は横に平面的に並べて理解するべきではなくして、縦に立體的に領受し顯開するべきであらう。然るに從來の眞宗學は、その事が看過されてゐたやうである。私はその一事を以ても、眞宗學が祖意に還りて新たなる出發を取るべきであると思ふものである。

五

これに依りて私は略ぼ眞宗學の意味を明らかにし得たと思ふ。それは善導大師の學行の精神に依るものである。それは學即行である意味に於て行學と言つてもよいであらう。これに對して學解がある。それは「凡より聖に至り、乃至、佛果まで一切無碍に皆な學ぶことを得」といはれてゐる。行學自から眞理を領解せしむる意味に於ては、學解も亦學行より生ずるものであらう。併しそれを行學に對せしむれば、學解といふものとなるのである。

茲に問題となることは、宗祖にも是の學解があつたか何うかといふことである。而して私は今その事を肯定せんと思ふてゐるのである。其の事は何よりも『華嚴經』『涅槃經』等の經典の引用されてゐることで證明さるゝであらう。法然上人には淨土の經釋の他なる引證はない。然るに宗祖にこれあるは留意すべきことである。而して夫等の經釋に對する宗祖の態度は、必ずしも淨土の經釋に對すると同一ではない。そこには取捨選擇もあり、是非の批判もあるやうである。そこに我等は學行に依る學解の相を見せしめられる。されば夫等の經釋を取捨し批判せしめしものは何であらうか。それは宗祖の個人的な

見解ではなくして。實に眞宗の經釋である。本願名號は淨土の經釋に於て既に眞實と方便とを分別せしめた。それが更に一切佛敎の眼目となりて、これを取捨しつゝ總合せしめたのである。

これに依りて我等は行學なしには、眞の解學もないことを思はしめらるゝ。同時に眞宗學に徹せん爲には、一般佛敎の解學も要することであり、また眞宗學に眼を開け來れば、一般佛敎學も一大眞宗學の内容たることを知らしめらるゝ。これに反して行學するところなくば、一切の解學も亦、所謂「假名の修學」となるであらう。これ洵に學徒の警戒すべきことであらねばならぬ。

——昭和一七・五・二八。眞宗學會にて——

補 說

眞宗に於ては、三學といふも唯だ一念佛である。その智慧なることは、智慧の念佛といひ、轉戒の正智とあるにて明らかである。また念佛三昧といはるゝことに於て、その定なることも異論はないであらう。唯だ戒の義は直接には見當らぬ。併し唯有清淨戒者のみの正法を聞くといはるゝ時、念佛を淨戒と領會せしめらるゝものあ

るを覺ゆることである。

宗祖は願意を推求せられた、學とは實にこの推求である。私は茲で忍は推求、智は決斷といふ性相宗の説を想起する。忍智並び行はるゝものが佛法の智慧である。それは純粹感情の無限性に於てのみ行はるゝものである。かくの如き忍智の學は、學んで學べりといふ跡を残さず、また學んで學び終れりといふことはない。

これに依りて思ひ合はさるゝことは、「信文類」に於ける眞佛弟子章である。弟子の稱は師に對して、その學徒たることを顯はすものである。さればそこに引用される觸光柔軟の願は弟子の感情であり、得無生忍の願は弟子の智慧といふべきであらう。その人は廣大勝解者である。説聽の方規に従へるものである。そこに達する爲には、假の佛弟子たることも止むを得ない。されど斷じて偽の佛弟子となつてはならぬであらう。然るに智慧は内觀せしむ。故に佛道は内の解脫を與ふるのである。隨つてそれは明らかに理知分別の學ではない、何故なれば理知分別の學は、畢竟これ外觀を教へるのみであるからである。——一七・六・三〇